

## 秀賞

### サッコラ

岩手県盛岡市立河南中学校

3年 笹原 美鈴

夏の宵、盛岡に心の琴線を震わす力強い「さんさ」の音が響き渡る。

「さんさ踊り」は、盛岡の伝統芸能で、毎年8月1日から4日間、盛大なパレードが行われる。独特な「サッコラチョイワヤッセ」という掛け声は、幸を呼ぶという意味で声を揃え全力で幸を祈るのだ。

また、迫力満点の太鼓の演奏は「和太鼓の同時演奏記録」でギネス認定されている。一度聴いたら忘れられないリズムカルな演奏をぜひたくさんの人に現地で体験してほしい。

多くの盛岡の人々にとってさんさ踊りとは「盛岡の伝統」「夏の風物詩」であり、盛岡になくてはならないものなのである。私も小さい頃から家族とパレードを観に行っていた。

小学校1年生の時に運動会のさんさ輪踊りで初めてさんさ踊りをした。その時は、一つ一つの振り付けが新鮮でとても楽しかった。

学年が上がるにつれ、人前で大きな声を出すことが苦手になり、楽しいはずのさんさ踊りは私にとって地獄のような行事になっていった。やがて、夏のパレードにも足を運ばなくなり私の世界から「さんさ踊り」は消えていった。

中学校2年生になり、部活に励んでいた最中、突然友人から「みんなを誘ってさんさに出ようよ。夏の思い出を作ろうよ。」と言われた。私は考えなしに「いいよ。」と返した。練習について伝えられ、いざ練習場所の公園に向う途中になって「行ってもいいのかな。」と後ろ向きな考えが溢れ出した。

友人たちと列に加わった。すると軽快なリズムの笛と地響きのような太鼓の音色に、胸が高鳴る感覚があった。小学生の時の記憶と前の人の踊りを頼りに列の和を乱さぬよう歩幅と歩数を調節しながら踊り歩くのはとても難しかった。気をつけることがあまりにも多く、きっと私の顔は般若の面のようにこわばっていたのだろう。隣の大ベテランの風格を感じさせるおばあさんがとてもステキな笑顔で声をかけてくれた。

「もっと笑顔で笑って！ 大きな声出してみんなさ笑顔届けよ！」

まさに目から鱗だった。小さい頃に観たパレードでは、さんさ踊りをする誰もが生き生きとしていた。だが、その時の自分は……自分の踊りに精いっぱい全く周りが見えていなかった。練習が終わる頃には辺りは薄暗く、ジメジメとした暑さで全身は汗でぐっしょりだった。

来たる次の練習に備えて、家で練習を開始した。リビングからダイニングまで一步一步何度も往復し、指先まで自分の想いを込めた踊りの感覚を身に付けた。

最後の練習日。気温も湿度も高くうだるような暑さだった。それなのに、踊り手たちの熱気と勢いはいつも以上で、私も無意識のうちに声が大きくなり笑顔になっていた。あまりの盛り上がり友人と目を合わせて笑った。練習が終わると、誰かの拍手を皮切りに、大きな拍手が湧き上がり公園を包み込んだ。

本番当日。美容院で浴衣の着付けにヘアセットをしてもらった。鏡に映る自分が、なんだかとてもキラキラして見えたことがうれしかった。

夕方になり、列をつくる時間になった。今まで内側でしか踊ったことがなかったが、外側で踊るように言われた。始めはプレッシャーで押しつぶされそうだったが、スタート地点に立ち心に浮かんできたのは、あの時の「笑って！」という言葉だった。自分の中でカチッとスイッチが入った。手をお腹に重ね、準備の姿勢をとる。

一つの太鼓が力強く鳴り始め、それに呼応するように他の太鼓・笛・鉦が鳴り、列が進み始めた。小さい頃観ていたパレードの中に自分がいるという感動と頭に響くさんさの音に、体じゅうの血が滾（たぎ）った。

「サッコラチョイワヤッセ。」自分史上最高の声と踊りができた。沿道の人たちも巻き込んで一緒に踊りたいくらい、通りに集まった全ての人がさんさを通じて心を一つにしていた。

さんさを通じて得た夏の思い出は、私の宝物だ。さんさ踊りは、元々、悪鬼退散を果たして、人々が喜び踊り囃したことから始まったと伝えられている。その歴史を踏まえた現在のさんさ踊りは、今を生きる人々のさまざまな厄災を封じて幸せを祈る祭りなのだ。踊り手として盛岡の伝統継承に関われたことを心から誇りに思う。これからも、故郷盛岡が前進する力になっていきたい。そしてそれは、きっと私自身の生きるエネルギーになるだろう。

今、私たちは多くの問題を抱えている。しかしこれからもさんさが盛岡の人間の魂を救い続けるように願う。

「幸呼来（サッコラ）チョイワヤッセ」盛岡——。